

2020年12月31日（木）

老球の細道584号

12月の言葉

会津バスケットボール協会 室井 富仁

コロナ、コロナで四季折々の季節感をまったく感じられないまま2020年が終わろうとしている。年を追うごとに成長し、純粋になろうと欲しているが思うようにいかない。が、わが孫たちは日々変身、進歩の毎日である。毎朝、孫息子が言う「爺と同じご飯（雑炊）食べる！」の殺し文句は、私の一日のスタートに火をつける。爺も言葉との出会いで変わる。

1・テレビから

◆「自分を信じること、自分のチームを信じること。信じることで報われることがあった」〈ウインターカップ男子決勝戦インタビュー：仙台明成高校監督・佐藤久夫氏〉：バスケットボール・ウインターカップ男子決勝戦はまさにミラクルのゲームだった。一時17点差がつき、東山の初優勝かと思われた。アウトサイドシュートが入らなくとも打ち続ける選手、打ち続けさせるコーチ、信は力なり。決定的な場面で功を奏す。

2・読書から

◆「私たちは制約を課したり課されたりすることに、常に抵抗感と違和感を保たなければならないのであって、絶対に慣れてしまっってはいけない」〈映画作家・想田和弘『イミダス現代の視点2021』集英社新書〉：今、コロナ禍だから多少の自由と権利が制限されるのはやむを得ないかもしれないが、いつの間にか「基本的人権」を失ってしまうことに注意。

◆「距離感を持つこと。一定の年齢までは子どもの手を放さず、しだいに目を放さず、やがて心を放さず。ずっと手を取り、足を取りは選手の心に無理がくる」〈『スポーツジャパン』日本スポーツ協会〉：個性的な選手を育てるためには、常に選手との距離感を保つことが要求される。親子関係も恋愛関係も原則は同じ。いつも一緒にそばにいたいと思っているのは自分だけである。人間はそもそも寂しい存在であり、さよならだけが人生である。

3・新聞から

◆「こちらの3密。綿密な準備、緻密な実践、濃密な成果。JAXA」〈朝日：かたえくぼ〉：流行語大賞に輝いた「3密」は小惑星探査機はやぶさでも使われている。バスケットボールのコーチの仕事にもマッチしたキーワードである。

◆「ちょっと変わったヤツが必要なんです。優等生ばかりを集めていてもいい酒になりません」〈朝日：折々のことば：興水精一〉：欠点のない原酒ばかりでは奥深い味のウイスキーはできないとサントリーウイスキーのチーフブレンダーは語る。バスケットチームも同じである。ちょっと変わったヤツを評価する度量の広さ、大きさがコーチに要求される。

4・トステイン・ロイブル氏からのメッセージ

「過去は私たちの頭の中にあります。未来は私たちの手の中にあります。」〈ブライアン・フォート〉：毎年メールでクリスマスメッセージが届く。常にポジティブに生きる彼らしい言葉が。明日が予測できない混迷の時代こそ「而今」。今この瞬間を全力で生きる